研究課題　観世音寺公験案の集成と研究

研究経費　六四六、九六〇円（前年度より繰越し分を含む）

研究組織

　研究代表者　　　森 哲也(九州大学大学院人文科学研究院・専門研究員)

　所内共同研究者　稲田奈津子・遠藤基郎（所内担当者）・山口英男

　所外共同研究者　重松敏彦（太宰府市公文書館・会計年度任用職員）・三輪眞嗣（神奈川県立金沢文庫・学芸員）

研究の概要

（１）課題の概要

　保安元（1120）年、筑紫観世音寺は東大寺末寺化に伴い、８世紀代以来の伝来文書について公験案を作成して進上した。それらは東大寺図書館を始め、国立公文書館（内閣文庫）等、寺外の各所にも分蔵され、確認できる公験案は24点を数える（１点は焼失、２点は正文）。本研究では、これら公験案24点を集成・翻刻して広く学界の共有財産化を図るとともに、地方寺院における文書保管、資財管理の実態解明、寺領経営の再検討等、公験案としての分析を行おうとするものである。2019年度は、公験案すべての釈文案を完成し、伝来過程等に関しても整理を行うことができた。2020年度は、昨年度の成果を踏まえ、共同研究者による検討を経て釈文を確定するとともに、公験案に関する分析を行って本研究の完成を図る。

（２）研究の成果

　2020年度も、新型コロナウイルス感染拡大防止対策の影響により、必ずしも計画通りに進捗しなかった部分もあったが、以下のような形で課題を遂行した。本課題の中核たる観世音寺公験案について、昨年度にひとまず完成した釈文案をもとに、公験案ごとに平安遺文、大日本古文書の文書番号、紙番号、伝来過程、関係する影写本・写真帳のデータ、参考文献等を加え、今後の活用に備えられるよう完成を図った。その過程で、従来の釈読や判（外題）の比定に関し修正案を示すことができた。公開された研究成果の他、具体的な分析として、森哲也が公験案の作成から伝来までを俯瞰した総論として「観世音寺公験案の基礎的考察」を、三輪眞嗣が観世音寺の末寺化と東大寺別当の関わりについて考察を加えた三輪眞嗣「一二世紀前半の東大寺別当と観世音寺・鎮西米－特に寛助に注目して－」をまとめており、これらはさらに検討を加えた上で、報告書に収録し学界の共有財産化を図る。また、2020年度に実施した延喜五年観世音寺資財帳の複製調査では、規則的に残る虫損の痕跡等から、現状に至る間に料紙が脱落した可能性も想定された。これは2019年度に行った延喜五年観世音寺資財帳の原本調査の成果（文字の訂正、紙継目の状況、紙背の記載等）と合わせ、釈文として掲載が難しい部分についても、補説のような形で報告書に盛り込む予定である。いずれも、共同研究という形で、正倉院文書、東大寺文書に関する調査・編纂・研究の経験知が生かされた成果といえる。